

【総論】

矢田貝家文書調査の経緯について

矢野正隆・富善一敏

はじめに

本誌の「総論」に詳説されるように、この研究プロジェクトの発端は「矢田貝家」に遺された歴大な資料群(矢田貝家文書)の「発見」であった。矢田貝家といえ、その数寄を凝らした建物や庭園がよく知られており¹、また、当主による文化的活動を通じて書画骨董の類が大量に蓄積されていた。この「矢田貝家文書」は、こうした文化財、文化資本が形成されるに至った活動の痕跡であるが、同時に、政治・社会・経済・文化等々この地域のあらゆる動向の証言者という側面も持つ。我々に求められたのは、この巨大な情報の塊を、如何にして21世紀の文脈の上に甦らせるかということであった。この課題への応答の仕方は、関わる立場によって様々であろう。本誌所収の諸論考は、学術研究という立場からの応答であるし、また、島根大学法文学部の学生達による企画展示(「近代伯爵のタイムカプセル」)は、大学における教育現場からの応答と言える。

もちろんこれだけでその全てが尽くされるはずもなく、今後この資料群が、あらゆる立場の人々にとっての知恵の源泉であり続けるためには、そこへのアクセスを保障する仕組みの整備が不可欠であり、その第一歩が、この資料群を対象とする調査研究とそれに伴う整理作業であった。その一連のプロセスは、本誌に掲げられるような、経済史、ライフヒストリー、建築史といった専門領域での研究と並んで、このプロジェクトでの大きな柱の1つであり、本稿は、その経過を報告するものである。

この資料群に対する初期の調査については既に詳細な報告があるので(富善2012、2013、2014)、ここでは、特にモノの動きという視点からその工程を振り返ることで、この資料群が本プロジェクトを通じて辿った履歴記録および現状の報告に代えることとしたい。

1. 概要調査

記録史料の整理における段階的手法を提唱した安藤正人のまとめに拠るなら、整理は4つの段階からなり、その冒頭に置かれるのが、概要調査(および概要目録の作成)ということになる(図1)。矢田貝家文書の調査も、この手法に従い、まず概要調査が実施された。

2011年4月、概要調査の開始に先立って、その詳細な工程が参加者間で共有された。ここでは、概要調査の全体が更に4つのステップに区分され、現場での作業手順が具体的に示されているが(図2)、実際の調査も概ねこの手順を辿って実施された。

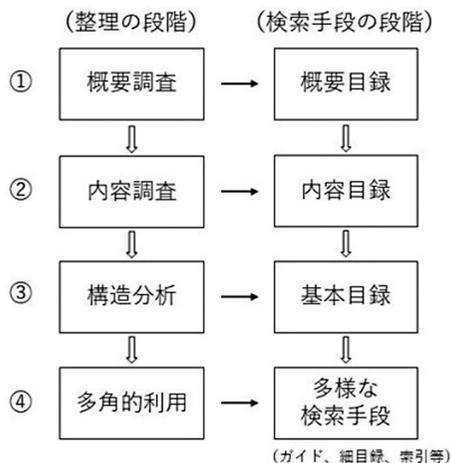


図1 記録史料の段階的整理

出所：安藤(1998), 112頁。

<p>ステップ1 調査対象資料の確認と ブロック番号付与</p>	<p>(1) 蔵2階奥にある資料の中から記録史料を中心に調査対象とする資料を確認(筆筒、箱、包などのブロックごと。この段階では容器等の入れ替えは行わない。) (2) 筆筒、箱、包などのブロックごとに【蔵1】【蔵2】…の番号札を付して別置。やむを得ずその場で仮収納や段ボール箱に入れ替えが必要なものは、入れ替えの前に番号札を付して現状記録写真撮影。</p>
<p>ステップ2 現状記録と取り出し</p>	<p>(3) 【蔵1】【蔵2】などのブロックごとに、 ① 全体撮影と、全体スケッチ(必要な場合)。 ② 資料のカタマリを確認しつつ、カタマリ番号を付箋で付しつつ取り出し(その際、スケッチにカタマリ番号をメモ。収納状況の記録が特に重要と思われるものは取り出し状況を写真撮影)。 ③ 取り出し時に必要最小限のクリーニング(ホコリ落とし程度)と仮まとめ(綿紐や薄葉紙を使用)を行うことは可。</p>
<p>ステップ3 概要調査とクリーニング</p>	<p>(4) 【蔵1】【蔵2】などのブロックごとに、 ① 資料のカタマリ情報を概要調査用紙に記入(1ブロックにつき1~2枚程度)。 ② 現状記録の必要なカタマリについては適宜写真撮影。 ③ クリーニング。</p>
<p>ステップ4 簡易保存処置と仮収納</p>	<p>(5) 【蔵1】【蔵2】などのブロックごとに、 ① 劣化、損傷の著しい資料の応急手当(保存班)。 ② カタマリごとの保存処置(防護紙、綿テープなどを使用)。 ③ 元の容器、段ボール箱などへの仮収納。</p>

図2 概要調査作業工程

出所：安藤正人が作成した図(未公表)を富善一敏が加工したもの。

上述のとおり調査の具体的な経過は既に詳細な報告があるので、ここでは、資料群のモノとしての動きを辿ることで、全体の推移を整理する。

そうした視点からまずポイントとなるのは、調査対象となる資料が現場の何処にあるかを把握し、これを「ブロック」「カタマリ」といったレベルごとに区分して、調査の単位を共有できるようにするという工程である(図2:ステップ1~2)。この単位が、その後の全ての作業(移動、記録撮影、目録作成など)の基礎となる。また、この段階で付されたブロック名や

カタマリ番号は、各資料を一意に識別する記号(公開時には請求記号)の元になるだけでなく、全資料の調査以前の状態とその後状態とをリンクする唯一の手がかりになることに注意しておきたい。以下、この点について少し丁寧に記録しておく。

この資料群は、一カ所に集中して収納されていたわけではなく、矢田貝家住宅内の複数箇所に分散して配置されていた。今回の調査対象となった資料は、矢田貝家住宅の複数ある建造物のうち土蔵と主屋に配置されていたものである(図3)。このうち資料が収納されていたのは、土蔵では、1階の「第一室」「前室」「廊下」、2階の「奥部屋」「手前部屋」、また主屋では、「ナンド」および「中二階」、離れの「オクナンド」といった区画であった²。なお、概要調査の段階では、記録史料の網羅的な把握を主眼としたため、土蔵の多くのスペースを占めていた書画骨董類をはじめとする様々なモノ資料については、調査の対象からは外されている³。

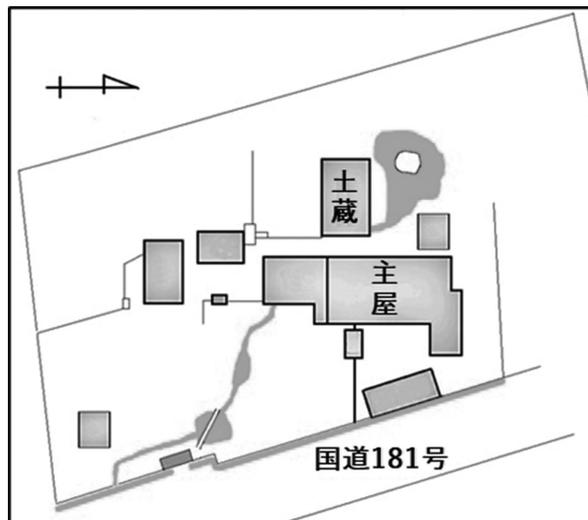


図3 矢田貝家住宅建物配置

出所：富善(2012)，105頁に加筆。

原資料は矢田貝家住宅パンフレット。

まず、これら大きな区画(表1の「位置1」「位置2」に相当)のそれぞれにおいて、実際に資料が収納されている棚や箆筒、物置などの場所ごとに名称を付与した(「位置3」「位置4」)。この区画が「ブロック」に相当し、たとえば表1のブロック番号①で言えば「土蔵2階・奥部屋・西面・4段目(床上)」のように表示することになる⁴。そのおおよその位置を図4に示す。この資料群のほとんどは、ダンボール箱などにそのまま移動可能な状態で収納されている訳ではなかったため、ブロックレベルの資料のまとまりが大きい場合には、移動できる容量を目安に適宜仕分けた。これが「カタマリ」にあたる(図2：ステップ2②)。

表1 矢田貝家文書の原初位置と分量

ブロック				ブロック 番号*	カタマリ数 (全145)	点数 (46,679点)	整理箱数(括弧内 は通番、全105箱)	
位置1	位置2	位置3	位置4					
土蔵2階	奥部屋	西面	4段目(床上)	①	25	7,928	18(Y001~Y018)	
		北面	棚上	②	19	6,077	11(Y018~Y028)	
			棚第1段目	③	4	1,680	3(Y029~Y031)	
			棚第2段目 (たんす引出)	④	2	91	2(Y032~Y033)	
		南面			⑤	13	6,005	6(Y034~Y039)
		床			⑥	1	1	1(Y040)
			茶タンス		⑦	6	6,049	6(Y041~Y046)
	手前部屋	北面	棚上	⑧	16	8,592	12(Y047~Y056)	
			棚1段目	⑨	4	124	1(Y057)	
		東面	タンス上	⑩	1	3,600	1(Y058)	
			床	⑪	3	591	3(Y059~Y061)	
			長持上	⑫	1	128	1(Y062)	
			中央小タンス	⑬	3	250	1(Y062)	
			階段横小タンス	⑭	3	254	1(Y063)	
土蔵1階	第一室	床		⑮	2	808	2(Y064~Y065)	
前室	西面	手前本棚	⑯	1	40	1(Y099)		
		奥本棚	⑰	2	146	1(Y100)		
	東面	本棚	⑱	3	286	2(Y100~Y101)		
廊下			⑲	2	653	2(Y066~Y067)		
	書籍		⑳	2	41	2(Y102~Y103)		
	図録		㉑	2	23	2(Y104~Y105)		
主屋	ナンド	仏壇下	タンス	㉒	3	243	1(Y068)	
		仏壇右上	押入れ	㉓	3	408	1(Y069)	
	オクナンド	北面	押入れ	㉔	5	254	10(Y070~Y079)	
			押入れ書籍	㉕	8	198	8(Y080~Y087)	
		南面	トコ上棚書籍	㉖	3	170	3(Y088~Y090)	
	中2階	仏間上		㉗	1	75	1(Y091)	
		土間上部	灯ろう	㉘	1	1	1(Y092)	
			木箱書籍類	㉙	3	394	3(Y093~Y095)	
			文書類・地券	㉚	1	432	1(Y096)	
		ミセ上部	手習類	㉛	1	197	1(Y097)	
	襖下張	㉜	1	940	1(Y098)			

注1：ブロック番号は本稿図4との対応関係を示すために仮に付したもので、調査時の資料の識別は整理箱の通番による。

注2：資料の点数は概要調査が終了した2013年9月段階で把握された概数である。

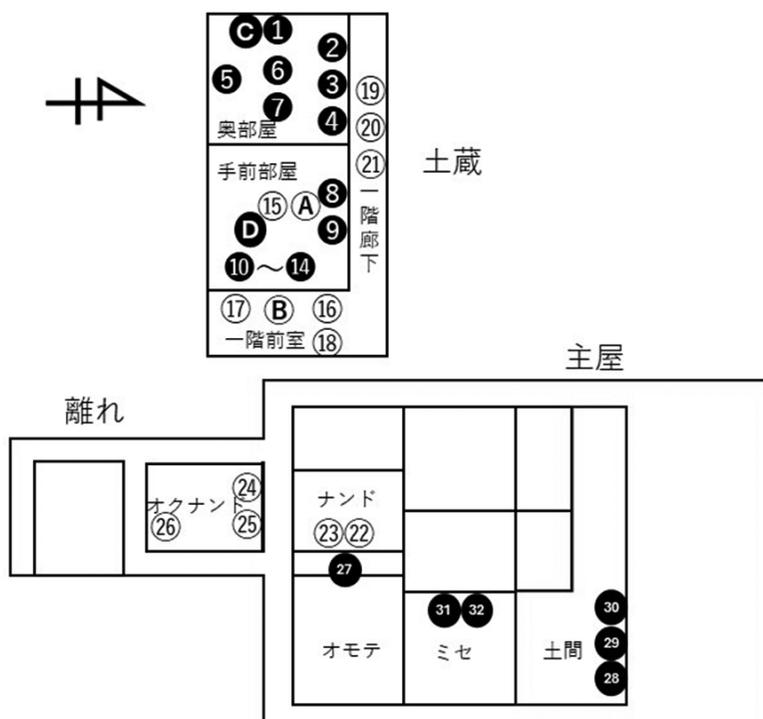


図4 矢田貝家住宅における資料収納位置

注：数字はブロック番号、アルファベットはデータロガー設置箇所、白抜きは2階。

参考までに、「土蔵2階・奥部屋・西面・4段目(床上)」のうちカタマリ18から22あたりの記録写真を示す(写真1)。この下部のボードに記されているのがブロック名、資料群の上に置かれている数字がカタマリ番号である。このブロックはかなり大きく、1から25までのカタマリに仕分けられた。なお、現状記録は主に写真撮影によったが、大きなブロックの場合、写真ではその全貌を1枚に収めることが困難であったため、現状はスケッチの形で記録された(図2：ステップ2①、図5)。スケッチにはカタマリ番号も付されており、個別の写真と照合することにより、元の資料の配置や状態を確認することができる。

このカタマリが管理上の基本単位となる。ただし、実際の整理工程で箱詰めする際には、必ずしも1カタマリが1箱に対応するとは限らず、たとえば、ブロック①の25のカタマリは18のダンボール箱に収納された。他のブロックも同様であり、結局、この資料群全体は、145のカタマリに仕分けられ⁵、105のダンボール箱に仮収納されることになった。5次にわたる概要調査(2011年4月～2013年9月)は、主に主屋のオクナントあるいはオモテおよびミセでおこなわれたが、調査時以外は、資料群は箱詰めされた形で、土蔵2階手前部屋および同1階前室の二カ所に仮置きされていた。



写真1 土蔵2階奥部屋西面4段目

鳥取県伯耆町上細見 矢田貝家文書現況調査 記録用紙(様式1)

No.

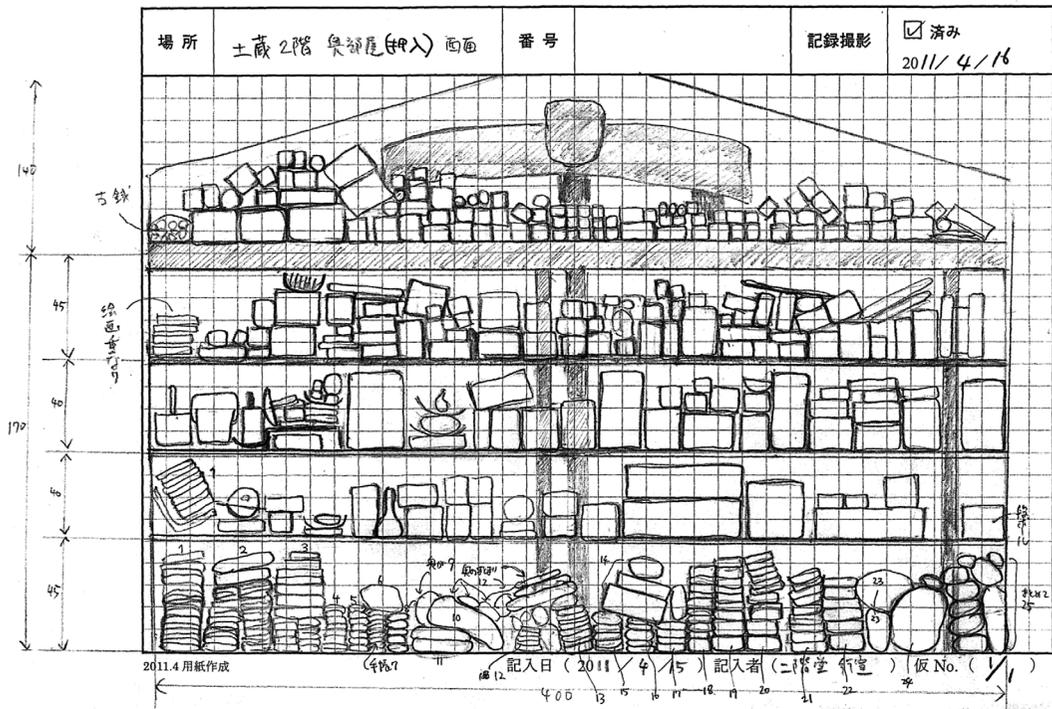


図5 土蔵2階奥部屋西面スケッチ(二階堂行宣作成)

2. 内容目録作成

2013年9月に概要調査が終了したのち、記録史料類を中心に⁶、アイテム単位での内容目録の採取作業が、東京大学経済学部資料室(以下「資料室」)および島根大学で分担して実施された(図1②)。前者が担当する分については、資料を東京に移送しての作業、後者は矢田貝家住宅の現地での作業である。表2に示すように、前者については概要調査時に詰められた全105箱のうち45箱が作業の進捗に併せて順次東京に移送され、後者分は現地(一部島根大学)に残

された。

表2 内容目録作業

	作業地	箱数	
2013/9/12 移送	東京大学	14	Y001, 005, 015, 017, 018, 024, 034, 036, 042, 046, 059～061, 068
2016/9/3 移送	東京大学	10	Y002～004, 006～008, 013, 022, 037, 038
2018/10/25 移送	東京大学	1	Y016
2019/5/23 移送	東京大学	3	Y021, 023, 062
2021/9/8 移送	東京大学	6	Y026～031
2021/9/15 移送	東京大学	1	Y025
2022/6/3 移送	東京大学	10	Y047～056
2022/9/15 作業	矢田貝家住宅	1	Y009
2024/9/2-4 作業	矢田貝家住宅	10	Y010～012, 014, 019*, 020*, 032, 033, 035, 039, 041, 043～045, 057, 058, 064

注：*は、2025年12月時点では作業中。

目録採取作業は、本稿を執筆している2025年12月の時点でほぼ完了し、最終のとりまとめ作業を待つ段階となっている。各カタマリの内容については、既に報告されているので(富善2012, 2013, 2014)、ここでも、整理工程におけるモノの動きを記録するに止める。

東京に移送された資料については、目録作業の開始前に、二酸化炭素を用いた殺虫処理が、送付の都度おこなわれた⁷。その後、段ボール箱に詰められているカタマリ毎の現状を再度写真撮影した上で、一点一点の資料を、必要に応じてクリーニングしつつ、中性紙封筒に入れた⁸。これに伴い、資料の容量が増えたことから、元の段ボール箱から専用の文書箱(アーカイバルボード使用)に入れ替えたため、現地で収納したダンボール箱のまともりはなくなっている。現時点で、資料室に送付された段ボール箱45箱に詰められた資料は、文書箱69箱に収められている⁹。このように、作業の進捗とともに「箱」単位の内容は変化していく可能性があるため、資料の同定のためには、初期の段階で付された「ブロック」の名称および「カタマリ」番号と、「箱」のリンクを管理することが不可欠であることに注意しておきたい¹⁰。

3. 環境調査

以上、矢田貝家文書のモノとしての履歴情報、つまり、これらがもともと何処にあり、整理の過程でどのような仕方でカタマリに区分され箱詰めされて、そのうちのどれがどのルートで移動してきたか、を概観した。

次に資料の状態であるが、本プロジェクトを通じて、保存管理という観点からの介入的処置は、調査や目録作成作業に随伴しておこなわれるにとどまり¹¹、現場の環境調査や各資料の劣化状態調査といった長期的管理のためのデータ収集・調査はおこなわれていない。これは、将来的な保存管理の場所や方法が定まっていなかったことにも拠るが、もうひとつ、資料群が生活空間に近接した比較的制御された場所にあり、甚大な劣化や損傷がほとんどみられなかった

表3 土蔵の環境

温度・相対湿度(月平均)

	温度(℃)					相対湿度(%RH)				
	A 1階奥	B 1階手前	C 2階奥	D 2階手前	米子	A 1階奥	B 1階手前	C 2階奥	D 2階手前	米子
2022年9月	24.5	23.5	25.1	25.3	23.0	70.2	74.2	68.6	68.1	78.6
2022年10月	18.6	17.1	18.5	18.8	17.0	68.1	72.8	68.4	67.2	74.5
2022年11月	14.5	13.3	14.2	14.6	13.6	68.0	73.4	69.4	67.7	75.9
2022年12月	7.1	5.2	6.1	6.6	5.8	64.9	71.4	67.7	66.2	71.5
2023年1月	5.4	4.5	5.1	5.7	5.1	67.8	73.7	70.9	68.9	76.5
2023年2月	5.3	4.9	5.0	5.4	6.0	69.4	72.3	72.8	69.6	72.0
2023年3月	11.8	11.1	11.6	11.0	11.2	67.9	64.7	70.7	70.1	68.6
2023年4月	15.4	14.0	15.2	14.3	14.3	65.9	62.9	68.6	67.8	68.0
2023年5月	19.8	17.7	19.7	18.2	18.6	64.4	66.8	66.0	68.7	69.1
2023年6月	24.3	22.0	24.2	22.6	23.2	66.2	73.7	67.6	72.4	76.4
2023年7月	29.1	26.5	29.1	27.1	28.0	68.9	78.6	70.4	76.2	74.9
2023年8月	31.3	28.6	31.2	29.5	29.8	64.8	73.8	66.7	73.6	71.7
2023年9月	27.3	24.9	27.1	26.3	25.6	66.7	77.0	68.9	73.7	80.5
2023年10月	20.3	17.8	20.0	20.0	18.6	65.6	71.1	68.2	70.6	70.5
平均	18.2	16.5	18.0	17.5	17.1	67.1	71.9	68.9	70.0	73.5

日較差(月平均)

	温度(℃)					相対湿度(%RH)				
	A 1階奥	B 1階手前	C 2階奥	D 2階手前	米子	A 1階奥	B 1階手前	C 2階奥	D 2階手前	米子
2022年9月	0.6	2.7	0.8	0.8	7.5	1.3	5.5	1.4	1.6	32.3
2022年10月	0.5	2.6	0.8	0.7	9.0	0.8	4.9	0.8	1.1	40.6
2022年11月	0.4	2.5	0.6	0.6	9.7	0.9	5.8	1.2	1.6	41.2
2022年12月	0.6	1.8	0.7	0.7	6.4	1.0	4.9	1.3	0.9	36.4
2023年1月	0.6	1.9	0.6	0.4	7.1	1.2	6.0	1.6	1.0	33.5
2023年2月	0.7	2.4	0.7	0.4	7.7	1.7	6.8	1.9	1.1	39.9
2023年3月	0.9	3.9	0.9	0.7	10.2	1.8	7.4	2.1	1.7	44.5
2023年4月	0.9	3.9	1.0	0.7	9.2	2.6	6.6	2.3	2.2	40.7
2023年5月	0.8	3.8	0.9	0.6	9.2	1.5	4.8	1.4	1.6	39.5
2023年6月	0.5	2.9	0.6	0.3	7.7	1.0	4.1	1.1	1.2	33.1
2023年7月	0.6	2.7	0.8	0.4	6.9	1.0	3.0	0.9	1.1	28.9
2023年8月	0.5	2.8	0.7	0.3	7.6	1.3	3.9	0.9	1.2	30.1
2023年9月	0.5	2.1	0.5	0.3	6.6	0.6	3.1	0.5	0.8	32.0
2023年10月	0.5	3.0	0.6	0.4	9.0	1.0	3.7	0.6	1.0	41.5
平均	0.6	2.8	0.7	0.5	8.1	1.3	5.0	1.3	1.3	36.7

ことにも拠る。この点に関して、資料の過半が収納されていた土蔵の温湿度記録が採取されているので、参考までに紹介しておく。

データロガー¹²は、2022年9月13日に土蔵の1階と2階のそれぞれ2箇所に設置し(図4に設置位置をアルファベットで記した)、温度および相対湿度を1時間単位で計測した。表3は、この4箇所の1ヶ月単位での平均値と、外気との比較のため米子市の計測データを集計したものである¹³。温湿度の月平均だけではそれほど明確ではないが、日較差(1日のうちの最高値と最低値の差)を見ると、外気と土蔵内の環境条件に顕著な差があることが看取できるであろう。参考までに、文書館等の収蔵施設における推奨値を見ると、たとえば国際標準(ISO11799:2003)では、温度は日較差 $\pm 1^{\circ}\text{C}$ 、湿度は $\pm 3\%$ 以内とされており¹⁴、1階手前(B地点)以外は、概ねこの範囲に収まっていることがわかる。もちろん、これ以外にも見るべきポイントはあるが、少なくともこの資料群の物的状態が比較的良好であることは、激甚な災害の直接的被害を受けていないことと併せて、この土蔵の環境条件に拠ると考えてよいであろう。なお、土蔵内を比較すると、1階手前(B地点)の環境が他の区画とは明らかに異なる値を示すが、ここは、土蔵東側に増築された1間巾(約1.8メートル)の下屋にあたる区画であり、土蔵本体とは環境条件が異なっていることを反映している¹⁵(概要調査では「土蔵1階前室」というブロック名が付されている)。

以上、断片的な情報の羅列になったが、資料群が蓄積された場所の環境と、そこから取り出された資料群がどのように仕分けされ、どのようなルートを辿ったかを整理した。プロジェクトの活動報告であると同時に、今後、この資料群を将来にわたり有効に活用していく上での前提となる基本情報として参照いただけたらと思う。

注

- ¹ 本誌所収の藤木論文参照。
- ² 建物の間取りについては本誌所収の藤木論文を参照。
- ³ 概要調査の段階では調査対象から外されたモノ資料については、のちの現地調査で順次確認されている。たとえば、土蔵2階奥部屋西面に配置されていた100点以上の掛軸は、2022年9月の調査で概要の把握がおこなわれた。
- ⁴ 土蔵における「奥」「手前」という表現は、主屋から見ての配置を示す。また主屋の「ナンド」「オクナンド」「ミセ」は、もともと矢田貝家で呼び慣わされていた名称である。
- ⁵ 富善(2012)、富善(2013)、富善(2014)における資料内容の紹介は、このカタマリ単位でのものである。
- ⁶ 刊行物類については、概要目録作成時にタイトル等の基本データは採取済みであったため、内容目録作業の対象からは除外した。
- ⁷ 日本液炭(株)製ファスナー付気密性バッグ「ふくろうくん」を用いて、二酸化炭素濃度60%程度、外気25°C以上の条件で2週間以上を目途に殺虫処理をおこなった。
- ⁸ ただし、書簡類のように括り紐毎にまとめて封筒に入れたものもある。
- ⁹ いっぽう、矢田貝家に残された資料については、このような殺虫処理や箱の入れ替えは行われていない。

- ¹⁰ 将来的な資料群全体の管理は、アクセスの面からは公的機関が一括しておこなうこと、また、地域に根ざした内容であることから、その収蔵場所は資料群がもとあった場所の近隣にあることが望ましい。しかし、資料群をこれまで蓄積してきた矢田貝家住宅や、初期から調査に携わった東京大学では、こうした条件を満たすことが困難なため、長期的な管理の主体や方法については、現在各方面で検討しているところである。
- ¹¹ 個別資料へのクリーニングや容器への収納のほか、資料収納空間への処置として、概要調査の開始時に、一部で虫損被害が見られたため、土蔵全体について燻煙剤による殺虫処理をおこなった(富善2012: 106)。
- ¹² Onset 社製屋内用液晶表示型温度 / 湿度データロガー HOBO UX100-003 (湿度精度 $\pm 3.5\%$ (15 $^{\circ}\text{C}$ -45 $^{\circ}\text{C}$, 25% -85% の範囲))。マニュアル (<https://www.pacico.co.jp/wordpress/wp-content/uploads/UX100-003.pdf>) による。
- ¹³ 米子市博労町米子特別地域気象観測所 (北緯35度26.0分、東経133度20.3分、標高6.5m)。地域気象観測所一覧 (https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/amedas/ame_master.pdf) による。
- ¹⁴ 国際標準化機構 ISO 11799: 2003「文書館・図書館資料の保管要件」(International Organization for Standardization, *Information and documentation —document storage requirements for archives and library materials*)。『アーカイブズ学用語辞典』38-39、109頁。
- ¹⁵ 本誌所収の藤木論文、注13参照。また藤木氏による登録有形文化財調書によると、この下屋区画は、ある時期には子供の勉強部屋として、別の時期には店舗営業の事務所として使用されていたとされ、物品収納のための区画とは一線を画する生活空間であった。

文献

安藤正人『記録史科学と現代：アーカイブズの科学をめざして』吉川弘文館、1998年

アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ学用語辞典』柏書房、2024年

富善一敏「矢田貝家文書第一次調査概報」『東京大学経済学部資料室年報』第2号、104-109頁、2012年

富善一敏「矢田貝家文書平成24年度調査概報：第二次・第三次調査」『東京大学経済学部資料室年報』第3号、75-85頁、2013年

富善一敏「矢田貝家文書平成25年度調査概報：第四次・第五次調査の成果と今後に向けて」『東京大学経済学部資料室年報』第4号、66-74頁、2014年